

小田島城跡出土の弥生土器

— 出土地点の検討をふまえて —

菅 原 哲 文

1 はじめに

山形県の東根市に位置する小田島城跡^{おだしま}は、一般には「東根城」の名でも呼ばれ、中近世の城館跡として、県内では著名な遺跡である。当遺跡の発掘調査は、平成9年から13年にかけて、3・4・1長瀬神町線都市計画街路事業に伴い、実施されている。

発掘調査では、城館跡だけではなく、中近世の遺構面より下層から、弥生時代の遺物包含層や合せ口土器棺墓が検出され、さらに縄文時代でも、中期を中心とした遺構や遺物が確認された。弥生時代の土器は、ほとんどが遺物包含層の出土である。中期前半を中心とした資料であり、今後県内での編年を考える上でも基準となる資料になると思われる。筆者は、平成15年度に縄文土器と弥生土器について、整理・報告書作成作業を担当した¹⁾。ここでは、すでに報告してあるが、小田島城跡出土の弥生土器の内容について整理し、未検討であった、遺物包含層の弥生土器の出土地点の提示と検討を行い、報告の補足としたい。

2 遺跡の概要と対象とする資料

小田島城跡は、山形県東根市大字東根字本丸・小楯・西楯他に位置する（第1図）。

遺跡は、白水川扇状地に張り出した舌状の丘陵地の先端部に立地する。遺跡の南側には、白水川と日塔川が流れ、遺跡の南約1の地点で合流し、さらに約5下流の地点で最上川に合流する。調査地点の標高は、約119～124mである。

小田島城は、正平二年（1347）に小田島長義によって築城されたと伝えられ、応永二年（1395）に東根頼高、天正十二年（1584）の天童合戦後には里見景佐が城主となった。江戸時代初期にも、最上氏の支城として里見氏が城主を務めた。寛文元年（1661）に廃城となった²⁾。

周辺の主な縄文時代・弥生時代の遺跡について述べる

（第1図）。花岡遺跡は、小田島城跡に隣接する遺跡で、縄文後期後葉から大洞A式まで継続する。1.5南には、小林A・B・C遺跡がある。小林A遺跡は、縄文時代前期前葉の集落跡が検出され、小林B遺跡では、配石遺構を伴う中期後葉の集落跡が確認されている。南西約3に位置する蟹沢遺跡^{かにさわ}は、縄文時代後期後葉から弥生時代まで継続する遺跡である³⁾。

調査区は、北側から、北二の丸地区・北二の丸堀地区・三の丸地区・龍興寺沼地区・南二の丸N地区・南二の丸S地区・南二の丸堀地区が設定されている（第2図参照）。

弥生時代の遺物が出土したのは、北二の丸地区である。北二の丸地区では、3面の遺構面が確認されている。報告書によると、第1面は中世後期（14世紀後半～15世紀初頭）、第2面は、奈良・平安時代から中世前期（12世紀後半～13世紀）、第3面で縄文時代の遺構が検出されている。第2面下では、弥生時代の遺物包含層がある。弥生時代の遺構では、合せ口土器棺と考えられる土器埋設遺構（SK533）が1基検出された。

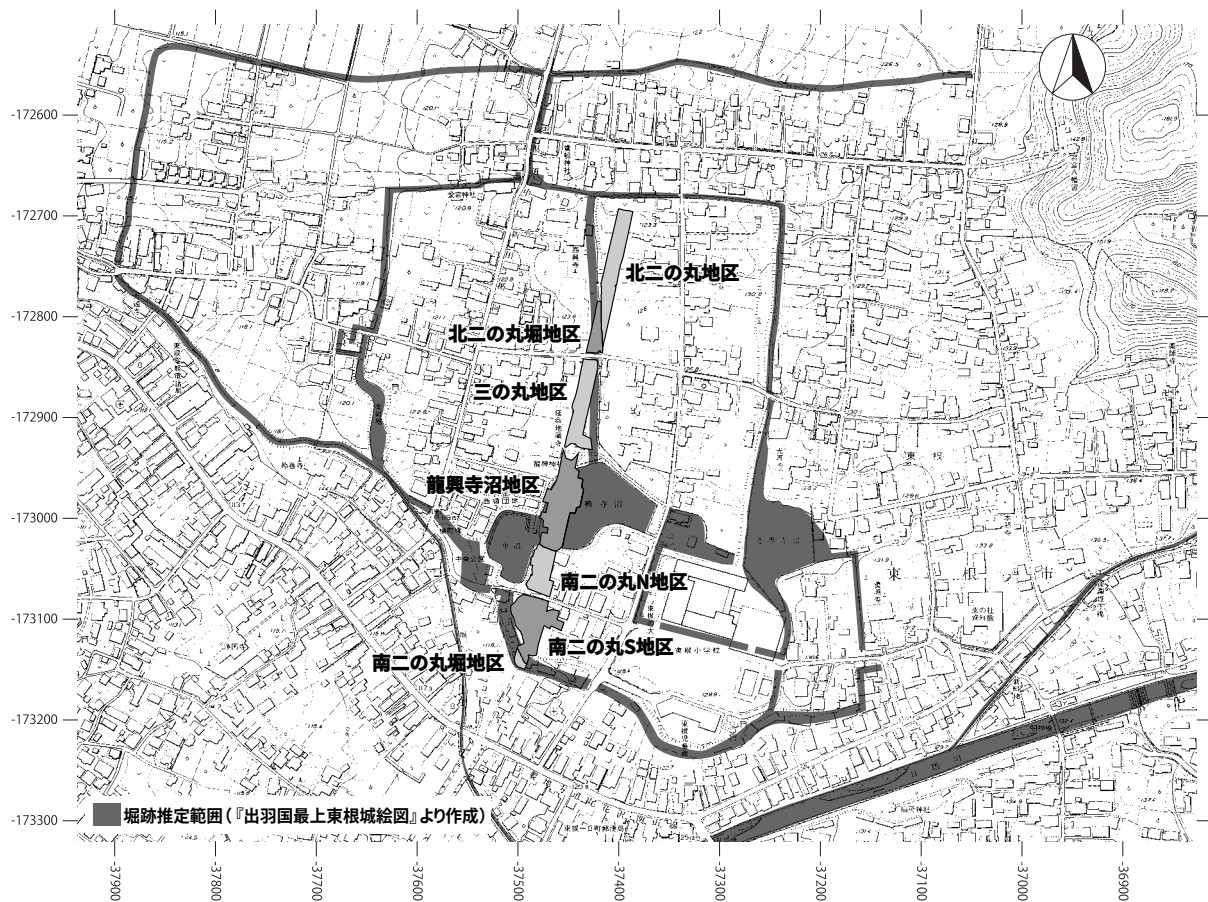
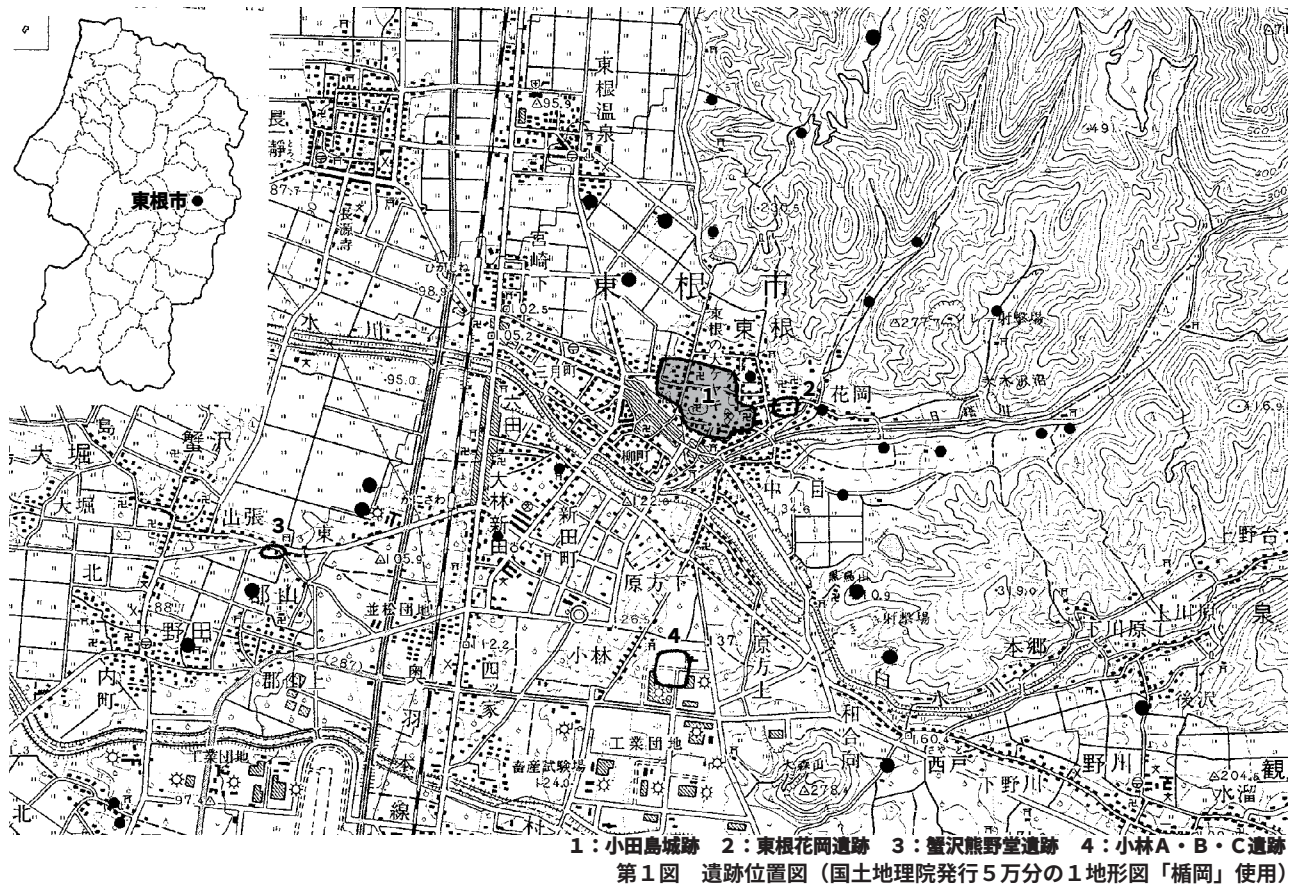
北二の丸地区の基本層序は次のようになる。層…耕作土。層…土塁を削平した時の堆積土で、礫を多く含む。層…炭化物・焼土を含み、上面が第1面の遺構確認面となる。層…弥生時代の遺物包含層となる。分布は、調査区の南端部のみである。層…砂礫層。層…縄文時代中期の遺物を含む。

3 弥生土器の概要

出土した弥生土器は、弥生時代中期前半が中心である。器種であるが、甕・深鉢・鉢および浅鉢・丸底鉢・高坏・壺・蓋が認められる。

報告書では、弥生土器を、器種・器形・文様を基に分類を行い、時期別に第群から第群の土器群を設定した⁴⁾（表1・2、第3～7図）。内容については、報告書に既に述べているが、整理し概要について述べる。

第群土器（第3図）は、東根市蟹沢遺跡の土器、仙



台平野の青木畑式に併行すると考えられるものである。
鉢・浅鉢は、1 A類が該当すると思われる。深鉢は、口縁部がくの字状に膨らむ2類が特徴的である。匹字状の

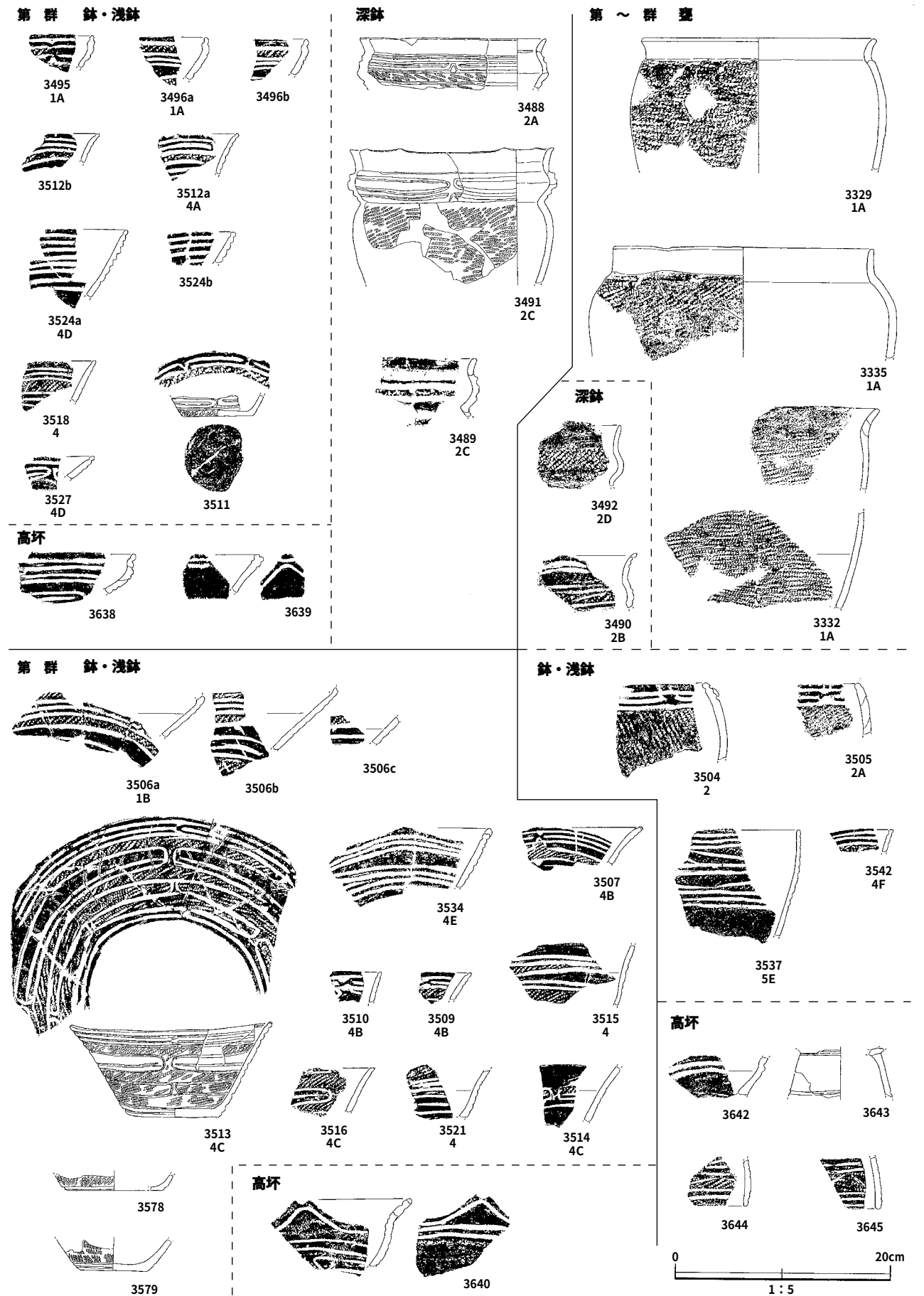
文様や、変形工字文が認められる。高坏は、太い沈線による変形工字文をもつものと、波状口縁になり波頂部に突起をもつものをこの群に含めている。

表1 弥生土器分類表

甕	1	平坦口縁の深鉢	鉢・浅鉢	D	沈線のみで、変形工字文を施すもの
	1 A	口縁部は無文、体部に縄文が施文		E	沈線で波状文を施すもの
	1 B 1	口縁部上端や口唇部に縄文、体部に縄文施文		F	平行沈線文を施すもの
	1 B 2	口頸部に布ナデ調整、体部に縄文施文		G	磨消縄文による文様が施されるもの
	1 C 1	口頸部に1・2条の沈線文		G 1	磨消縄文による王字状の文様
	1 C 2	口頸部に1・2条の沈線文と、布ナデ調整		G 2	磨消縄文による垂下文
	1 D 1	頸部に列点文		G 3	磨消縄文による入組文
	1 D 2	頸部に列点文、口頸部に布ナデ調整		G 4	磨消縄文による連弧文
	E	無文のもの		H	細書きの沈線で工字状の文様を施すもの
	2	口縁部が波状や小波状となるもの		I	細書きの沈線で連弧文状の文様を施すもの
深鉢	1	口縁部が内弯するもの	高坏	J	縄文のみが施文されるもの
	1 A	縄文が施文されるもの			
	1 B	磨消縄文による文様			
	1 B 1	磨消縄文による、菱形・三角形の文様	丸底鉢		底部が丸底、体部にかけて内弯しながらふくらみ頸部でしまり、口縁部が外反する
	1 B 2	磨消縄文による渦巻状の文様			
	1 B 3	磨消縄文による入組文	壺	A	体部無文、口縁部は無文か、沈線による簡略な文様
	1 B 4	磨消縄文による王字状の文様		B	体部に縄文が施されるもの
	1 B 5	磨消縄文による連弧文		C	磨消縄文による文様
	2	口縁部がくの字状に膨らむもの		C 1	磨消縄文による入組文
	2 A	匹字状の文様		C 2	磨消縄文による菱形・三角形文
	2 B	平行沈線文間に波状文		C 3	円文や方形文により、重複した文様構成
	2 C	くずれた工字状文		C 4	細い沈線により、方形文が描かれるもの
	2 D	縄文が施文されるもの		D	沈線による文様が施されるもの
				D 1	工字文が施されるもの
				D 2	細い沈線による工字文が施されるもの
鉢・浅鉢	1	底部から体部にかけて開き、口縁部が内弯、口縁内面に沈線があり肥厚	蓋	A	縄文が施文されるもの
	2	口縁部が大きく内弯するもの		B	無文のもの
	3	底部から体部にかけて開き、口縁部が大きく内弯、大形		C	平行沈線文を主体とした文様
	4	底部から口縁にかけて直線的に外傾、あるいは外反		D	磨消縄文による文様
	5	底部から体部上半にかけて緩やかにたちあがり、口縁部が内弯		D 1	磨消縄文による入組文
	6	小形で筒状の形態のもの		D 2	磨消縄文による連弧文
	7	頸部にくびれ部分をもち、口縁部がくの字状に外反		D 3	磨消縄文による楕円文
	A	匹字状の文様が施されるもの		D 4	磨消縄文による三角形文
	B	平行沈線を上下から彫去した匹字状の文様		D 5	波状文が施されるもの
	C	磨消縄文による変形工字文を施すもの		E	沈線による鋸歯文が施されるもの

表2 弥生土器分類表（群）

	鉢・浅鉢		丸底鉢	蓋	壺	深鉢		甕
群	A	C・D・E・F Jの一部		A・B・C の一部	A・B の一部	2		1 A・1 B 1 1 C 1・2
群	B					1 A	2類の 一部	
群	G 1～3		丸底鉢	D	C 1・2 C 3 D 1	1 B 1～4	1 B 5	1 D 1 1 B 2 1 C 2 1 D 2
群	G 4・H				C 3 C 4・D 2			
群	I			E				

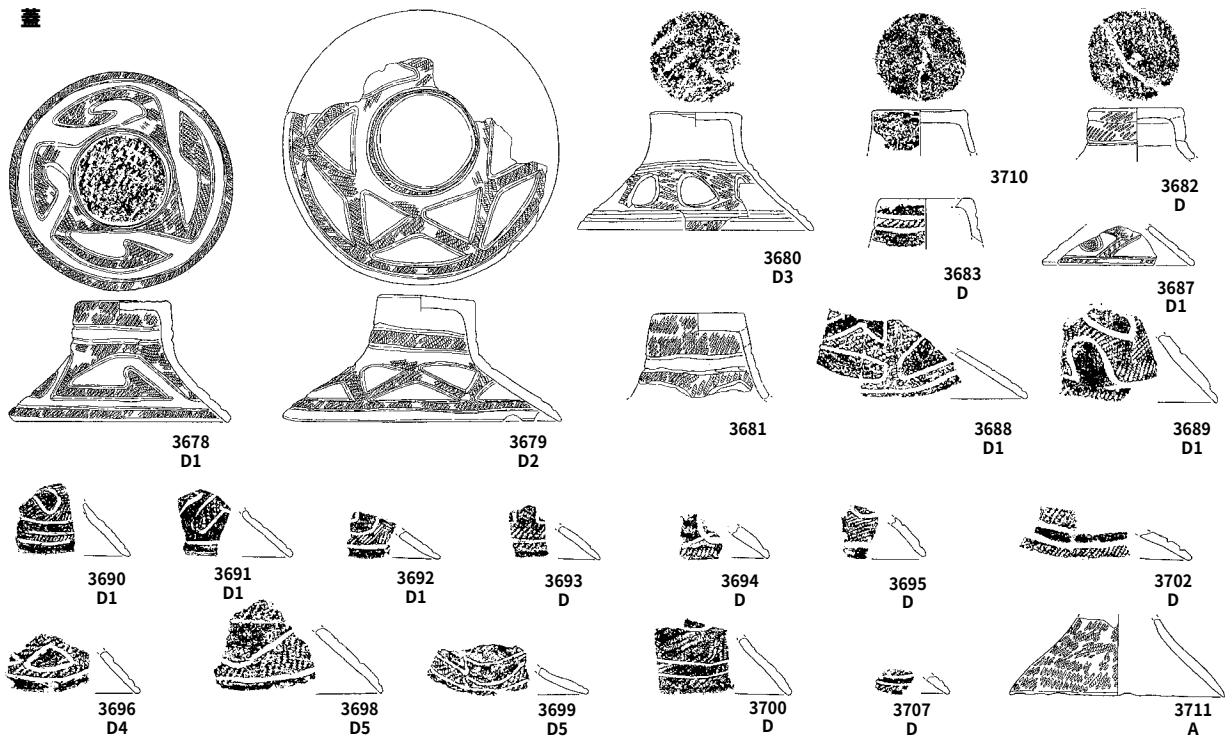


第3図 第・群弥生土器

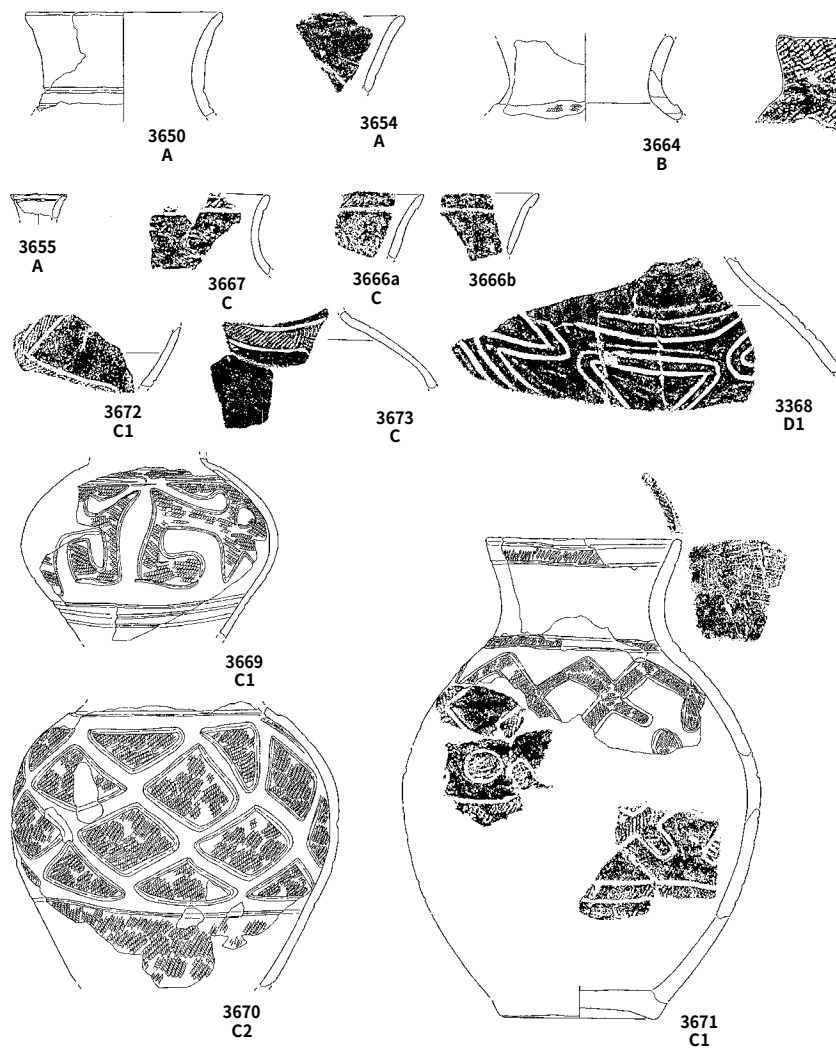


第4図 第 群弥生土器（鉢・浅鉢・深鉢）

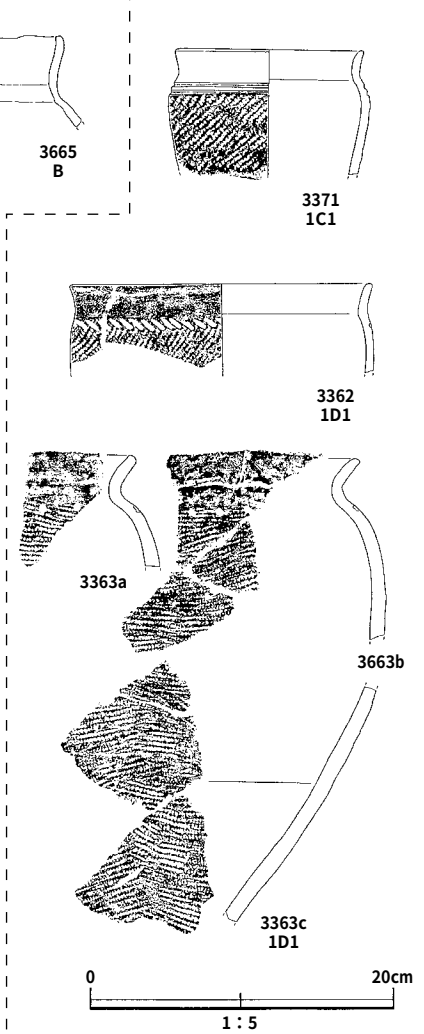
蓋



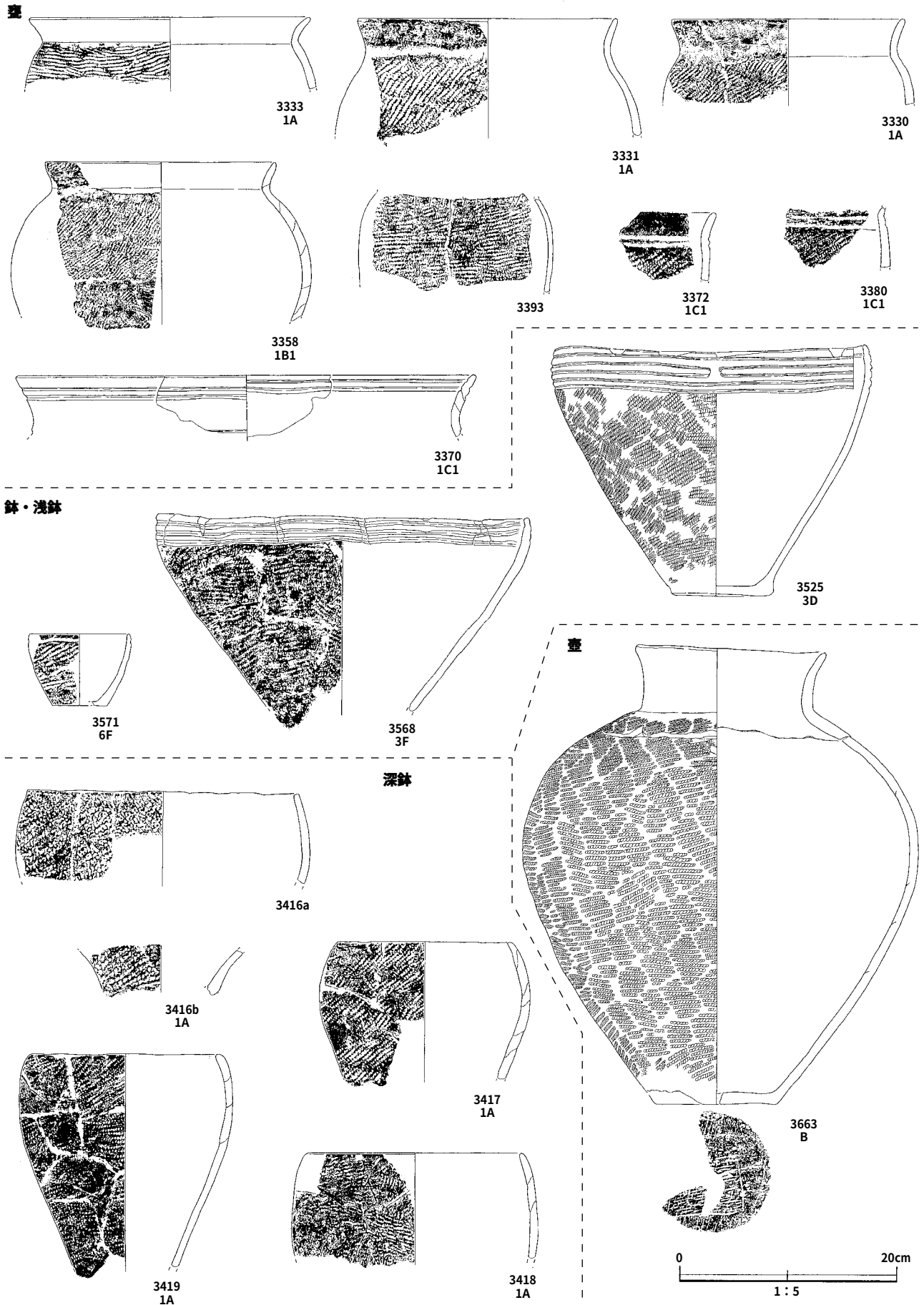
壺



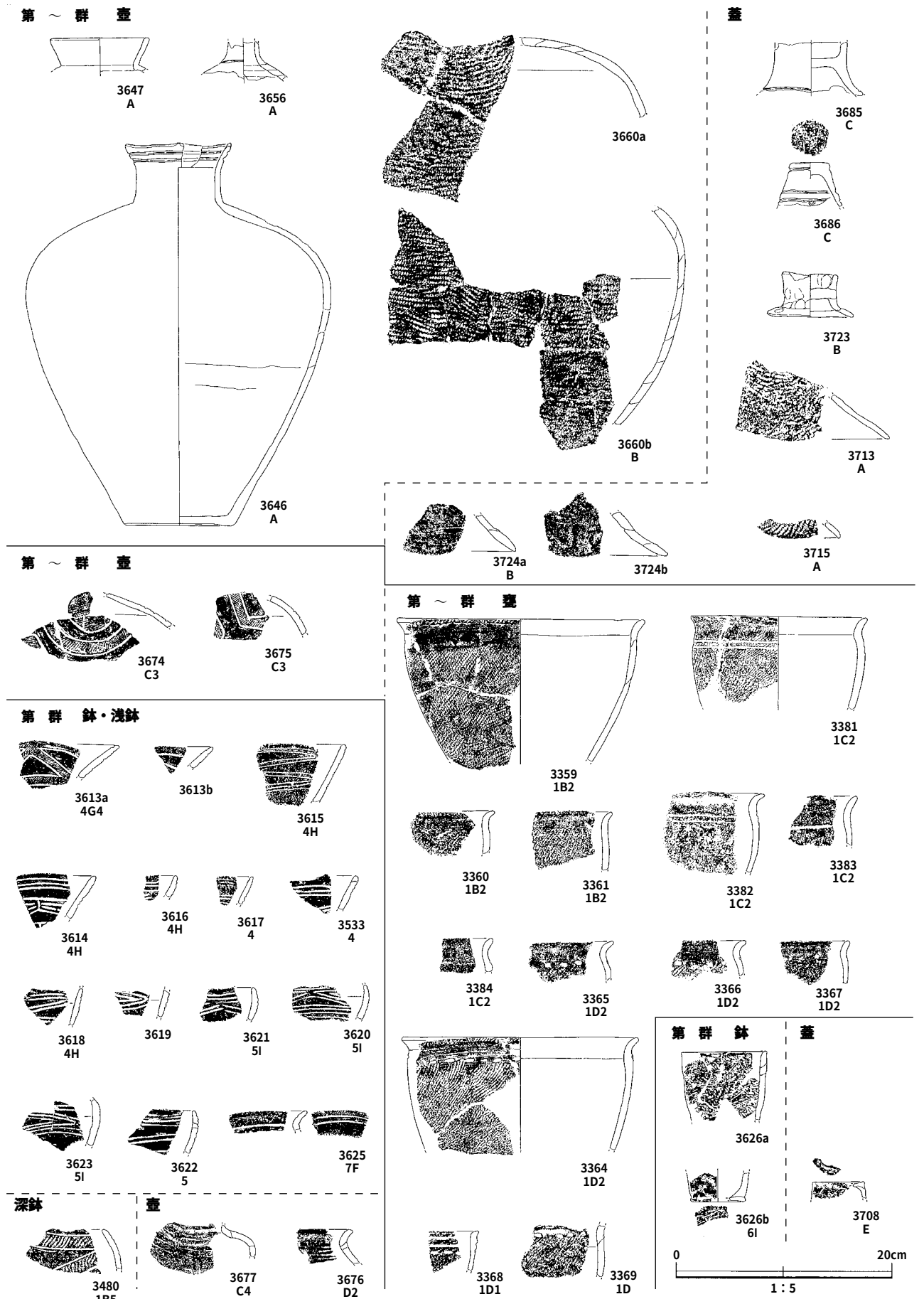
甕



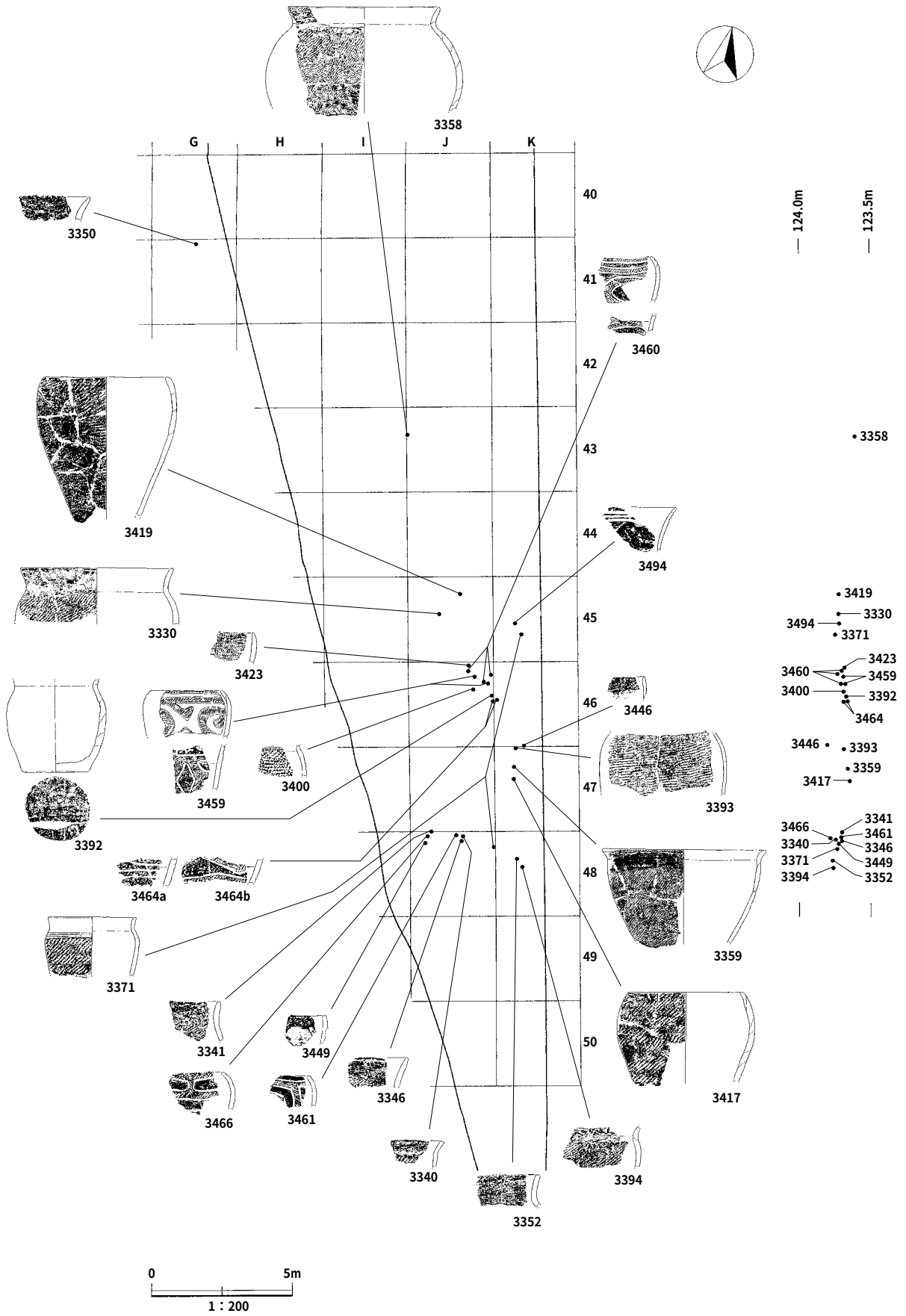
第5図 第 群弥生土器 (蓋・壺・甕)



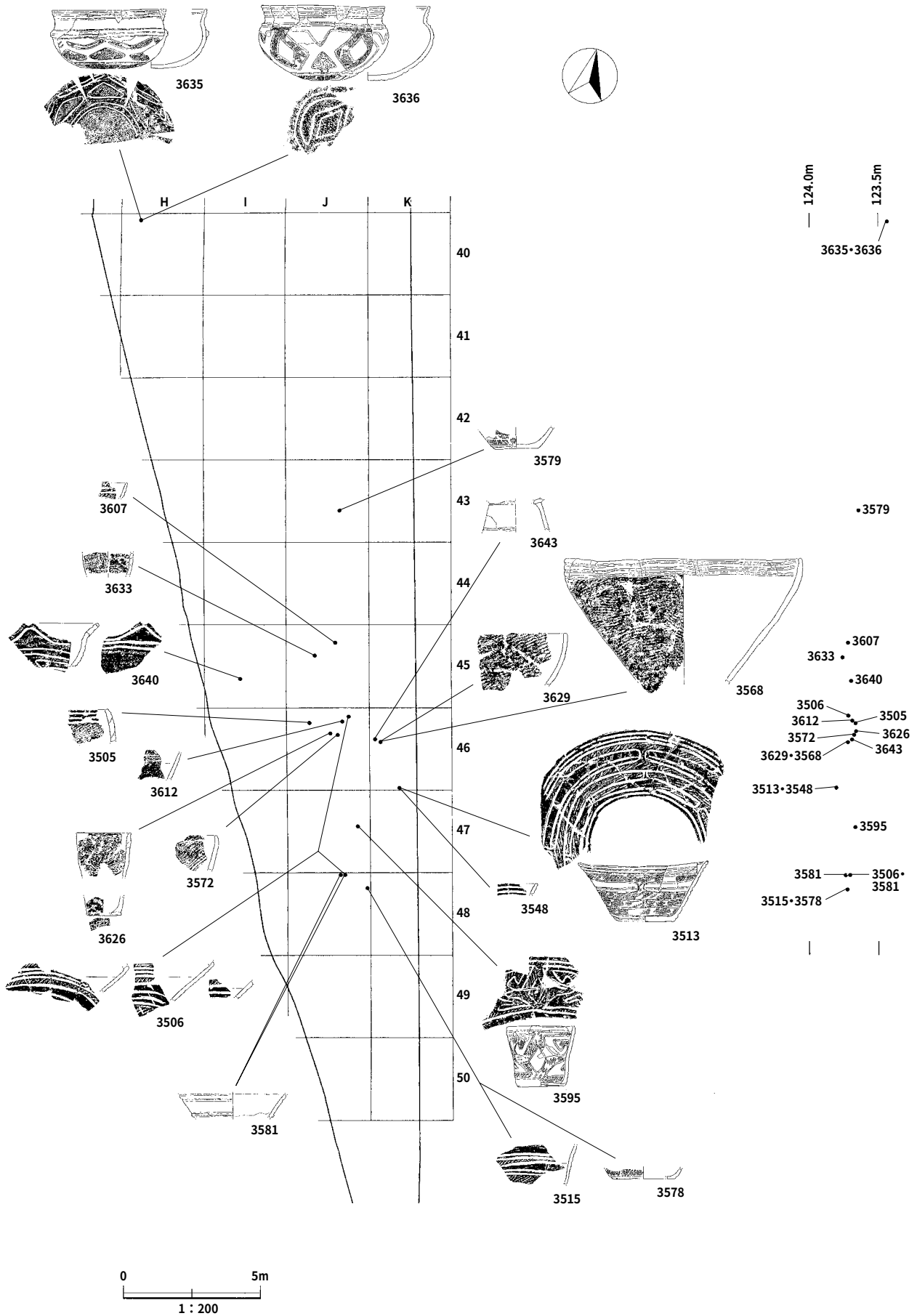
第6図 第～群弥生土器（鉢・鉢・浅鉢・深鉢・壺）



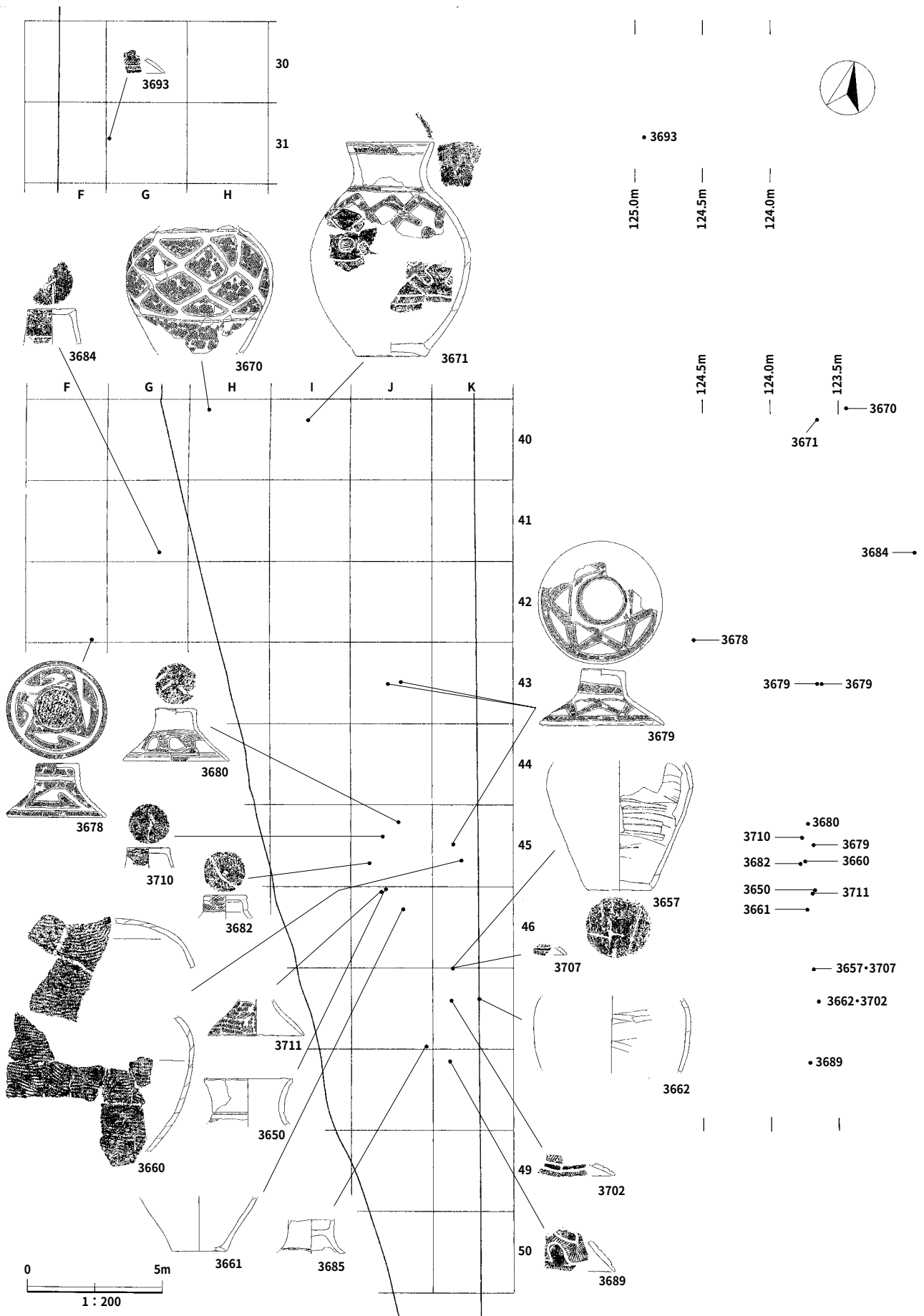
第7図 第 群 (壺・蓋)・第 群 鉢・第 群 鉢・第 群 鉢 弥生土器



第8図 遺物出土状況（甕・深鉢）

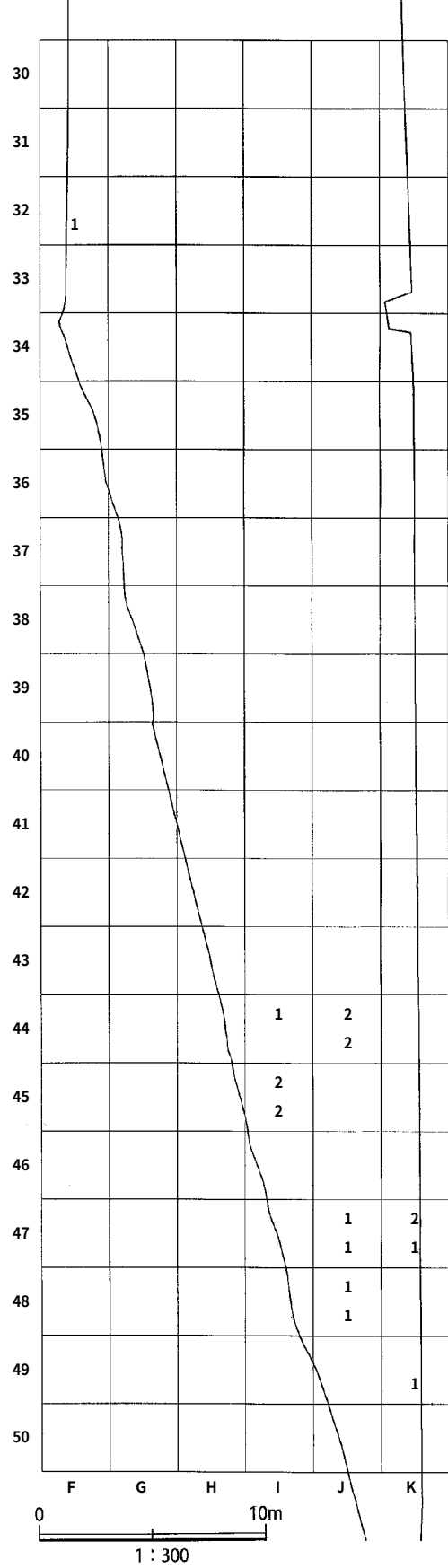


第9図 遺物出土状況 (鉢・高坏)

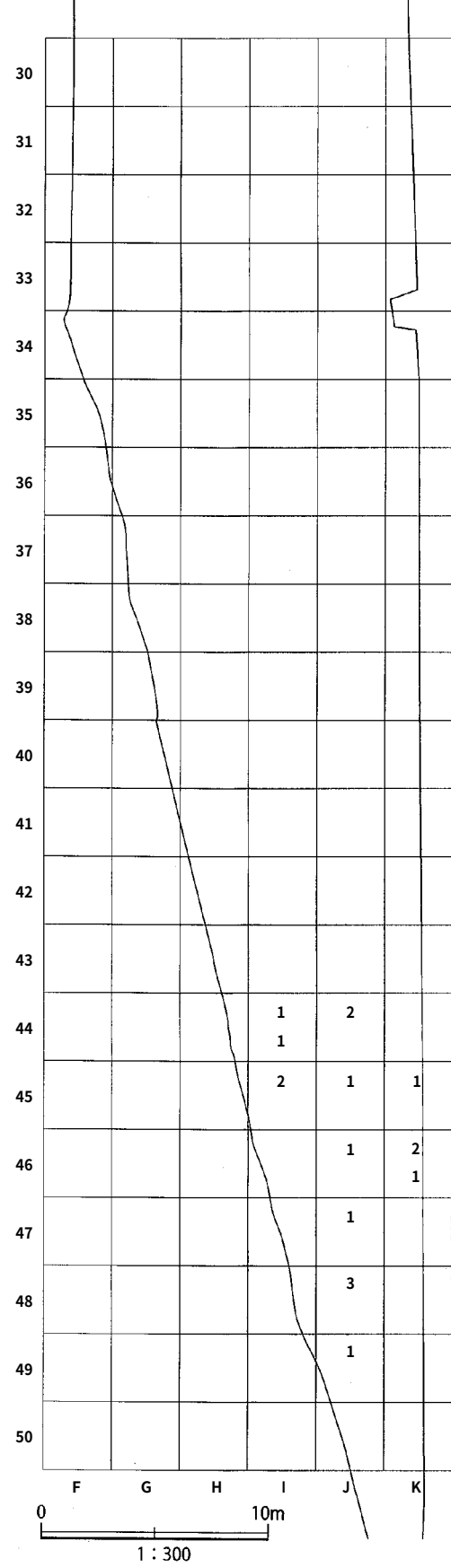


第10図 遺物出土状況（壺・蓋）

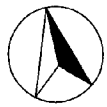
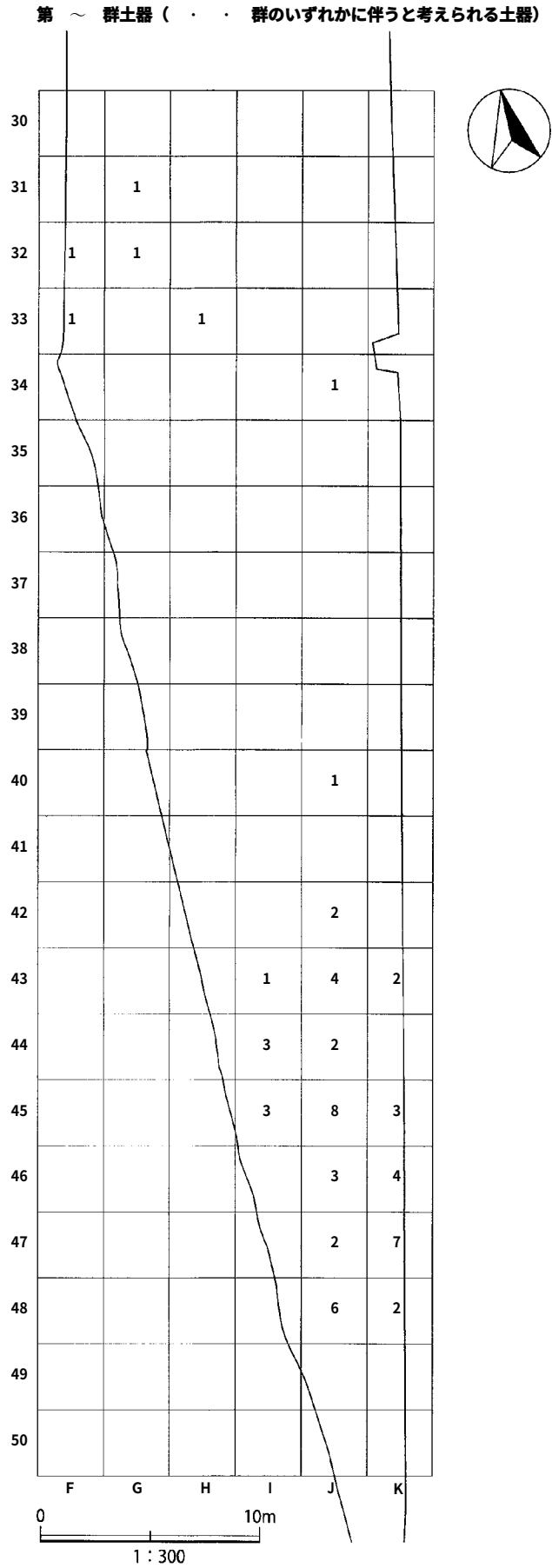
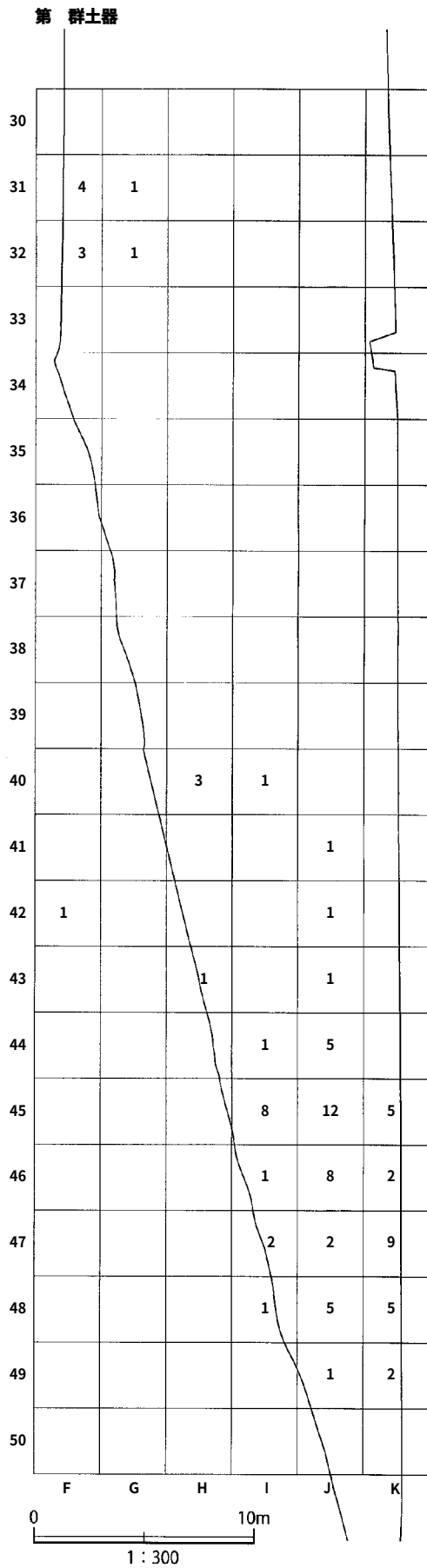
第・第 ～ 群土器 (上の数字は 群土器、下の数字は
～ 群土器の個体数を示す)



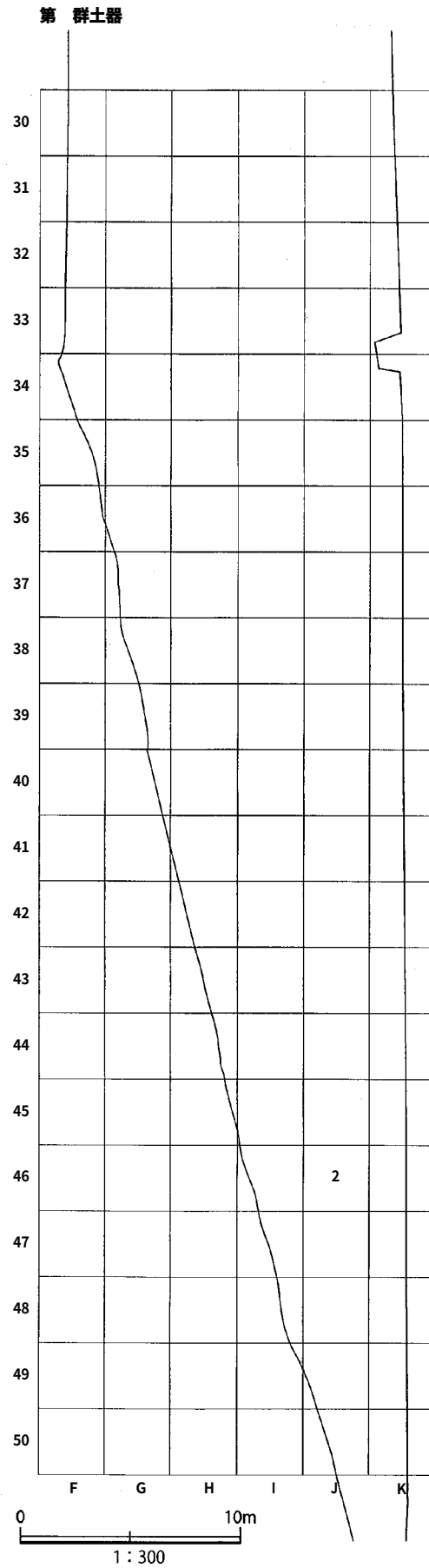
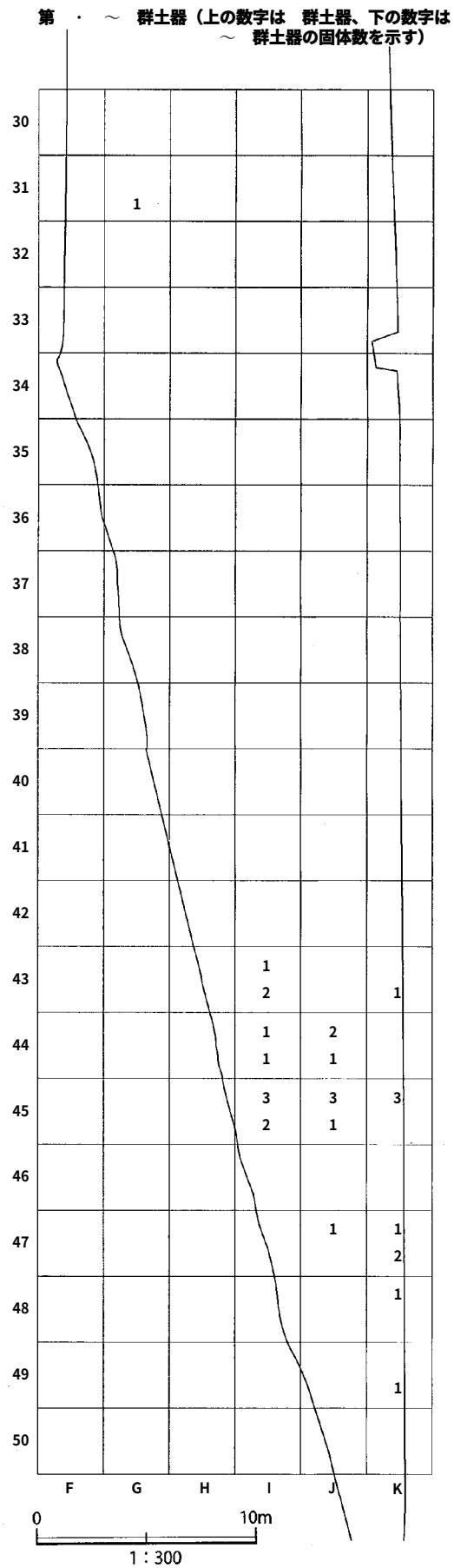
第・第 ～ 群土器 (上の数字は 群土器、下の数字は
～ 群土器の個体数を示す)



第11図 北二の丸地区遺物出土状況 (第・群土器)



第12図 北二の丸地区遺物出土状況 (第 ・ 第 ~ 群土器)



第13図 北二の丸地区遺物出土状況 (第 群土器)

第 群土器（第3図）は、蟹沢遺跡、天童市地蔵池遺跡出土の資料、仙台平野の山王 層式に併行すると考えられるものである。鉢は、1 B・4 B類が主体と考えた。平行沈線文を上下から彫去し、間を連結した文様（3506・3507）が特徴的である⁵⁾。変形工字文C 2型⁶⁾に類似する文様が施される鉢4 C類（3513）をここに含めている。工字文の文様の折り返し部分の間に、上下2ヶ所の短沈線を入れる文様が特徴的である⁵⁾。高坏は、変形工字文が施され、波状部分に刻みが入る、波状口縁の類をここに含めた。

また、 群から 群土器に伴うものとして、短く外反する口縁、直立気味となる口縁で、頸部の境に段をもち、荒い縄文が施される甕1 A類が該当するものとした。深鉢は、2類の一部で、縄文のみが施される2 D類、屈曲部がなだらかで、波状文が施される2 B類をこの中に含めた。高坏は、文様は不明であるが、太い沈線による平行沈線をもつもの、脚部に波状文をもつ類を含めた。

第 群土器は（第4・5図）、山形市松留遺跡・地蔵池遺跡出土の資料、阿武隈川水系の鱸沼式に併行すると考えられるものである。様々な磨消縄文による意匠が認められる類をここに含めている。鉢・浅鉢類は、4類が多く、沈線による変形工字文、C型変形工字文の退化した文様や、波状文、磨消縄文によるG類がある。3529の文様は、変形工字文の折り返し部分の対向部分の間に、縦方向の短沈線が入る。丸底鉢（3635・3636）は、この群を構成する特徴的な器種である。口縁部に沈線による工字文状の文様が入り、体部から底面にかけて磨消縄文による、菱形・三角形・連弧文状の文様が入る。3636には、沈線区画内を刺突で充填する手法がみられる。宮城県角田市鱸沼遺跡に、同じ器種や文様をもつ個体が認められ、この地域の影響が伺われる。山形県内では、器種や文様は少し異なるが、地蔵池遺跡で認められる。深鉢は、口縁部が内弯する1類のなかで、特徴的な文様があるB類をこの群に含めた。縄文のみが施文されるA類は、主にこの群に伴うものと考えられるが、出現は前段階からも認められることが想定されるので、第 群のいずれかに伴うものとした。この深鉢1類は、内外面に炭化物が付着する個体が多い。蓋についても、磨消縄文による入組文・連弧文・三角形文・楕円文などのD類をこの群に含めた。無文のB類、縄文のみが施されたB

類も主にこの群に伴うと思われるが、第 群にかけて伴うものとしておく。壺については、やはり磨消縄文による文様を施す類をこの群に含めた。文様要素の乏しい壺A・縄文のみが施される壺B類については、やや広口になる器形をもつものをこの群に伴うものと考えた。

第 群としたものは（第6図・第7図上）、 から群のいずれかに含まれると思われるが、明確に判断できなかった類をまとめた。甕1 A・1 B 1・1 C 1の多くが該当する。鉢・浅鉢では、沈線による平行沈線文や波状文、工字文が施されるものの一部、縄文のみのものが該当する。深鉢は、1 A類が含まれる。壺・蓋についても、無文や縄文のみが施される個体、平行沈線文で時期の判別がつかないものがある。この群の中に含めた3525の鉢と、3663の壺は、SK533の墓壇に土器棺として納められていたものである。

第 群土器としたものは、口頸部に布ナデ調整が入る甕1 B 2・1 C 2類、頸部に列点文が入り、布ナデ調整が施される甕1 D 2、壺では、やや細い沈線により、重複した円文や方形状の文様が施されるC 3類を含めた。

第 群土器は（第7図下）、仙台平野の枳形囲式に併行すると考えられるものである。鉢・浅鉢4・5類が多い。鉢・浅鉢は、G 4・H類などの細書きの沈線による連弧文や工字文が施されるものを含めている。深鉢は、連弧文が施される1 B 5類、壺は細書きの沈線によるC 4・D 2類が含まれる。

第 群土器は（第7図右下）、中期後半に位置づけられると推定されるものである。3626は、細い沈線で連弧文を施す。3708は、細い沈線で鋸歯文が施される蓋である。

このように、小田島城跡出土の弥生土器は、型式に時間幅が認められる。第 群土器の出土量が最も多く、次いで第 群土器が多く、第 群や第 群土器は少量である。第 群は僅かである。

4 出土地点について

次に、遺物包含層で出土地点の記録を行った土器の地点の提示と、それぞれの土器群について、分布に時間的な傾向があるのかどうか検討を行うこととする。

遺物包含層 層は、東から西にかけて緩やかに傾斜する地形に堆積し、黒褐色砂質シルトの厚さ約5～30 の層である⁷⁾。断面図は、報告書の第44図に提示されてい

る。弥生土器は、廃棄されたものと考えられる。層の遺物の出土傾向であるが、報告書の第57図でグリット毎の接合前破片数の状況が提示されている。これによれば、遺物出土の集中地点が2ヶ所認められる。1つは、I—K—43—49グリットと、それに派生する小ブロックのH・1—40グリットに分布が認められ、これを1ブロックとする。2つ目は、離れて北側の、F—31・32、G—31グリットに分布が確認される。これを2ブロックとしておく。

弥生土器は、出土位置の点取りを行っているものと、一辺3mで設定したグリットで取り上げているもの、遺構やトレンチから出土したものがある。報告書に掲載された土器で、点取りを行っている遺物の数は63点、グリットで取り上げている遺物の数は281点、その他、遺構やトレンチ出土の数52点、合計396点である。このうち、出土位置を検討するのは、点取り遺物が63点、これにグリットで群の位置づけが可能であった個体を加えて209点である。

北二の丸地区南半部分で、点取りを行っている遺物の平面分布と垂直分布を第8図～第10図に示す。図中の遺物番号は、報告書に掲載した時の番号をそのまま踏襲した。第8図は深鉢・甕の分布である。第9図は、鉢・浅鉢・丸底鉢・高坏の分布である。第10図は、蓋・壺の分布である。

1ブロック南側の、J—45・46・48、K—45・46・47・48に分布の中心が認められる。第9図の鉢類等の平面分布では、同じ1ブロック中で、第Ⅰ群土器の分布が認められ、混在して出土している。また、同図の垂直分布でも、群別に出土レベルの分離が認められたり、出土位置の高低差は確認されない。一部調査区外に分布があるものについては、北二の丸堀地区にかかる部分であり、この地点については堀跡内になるため、元位置を保っていない。

グリッド毎に土器群別に分けた場合の分布を、第11図から第13図に示した。グリット内の数字は、土器群の位置づけが可能である遺物で、そのグリットから出土した、点取りを行った遺物とグリット上げを行った遺物の合計の個体数を示す。以下、各土器群の出土数の分布について述べる。

第Ⅰ群土器の分布は、(第11図左・グリット内の上の数

字) 1ブロックの南側、I—44・45、J—44・47・48、K—47に分布する。点数も10点未満と少ない。同図の下の数字は、Ⅱ群土器、すなわち、Ⅲ群のどちらかに属すると思われる土器の個体数を示す。個体数は10点未満である。1ブロックのI—45・J—44・47・48、K—47・49のほか、2ブロックのF—32にも1点であるが分布している。

第Ⅱ群土器、第Ⅲ群土器(第Ⅱ群と第Ⅲ群のどちらかに属すると思われるもの)の分布を第11図の右に示した。グリット内の上の数字は、第Ⅱ群土器の個体数、下の数字は、第Ⅲ群土器の個体数を示す。第Ⅱ群土器は、1ブロック南側を中心に分布する。合計点数は17点である。グリットは、I—44・45、J—44・45・46・47・48・49、K—46・47に分布する。第Ⅲ群土器の分布は、1ブロックのJ—44、K—47に分布が認められる。

第Ⅲ群土器の分布は、第12図左に示した。

1ブロックと2ブロックに分布が認められ、最も広範囲に出土している。総数は87点である。1ブロックでは、南側のH—43、I—44・45・46・47・48、J—43・44・45・46・47・48・49、K—45・46・47・48・49に分布する。北側では、H—40、I—40、J—41・42に分布する。2ブロックでは、F—31・32、G—31・32に分布する。

第12図右に、第Ⅳ群土器の分布を示した。これらは、粗製の甕・深鉢や、平行沈線文など時期的な決め手に欠ける個体で、第Ⅱ群から第Ⅲ群の中に位置づけられると考えられるが、明確に各群の中に分類できないものである。1ブロック・2ブロックそれぞれに分布する。

第Ⅱ群土器の分布、及び第Ⅲ群土器の分布を、第13図左に示した。ここで第Ⅳ群土器としたものは、第Ⅱ群と第Ⅲ群に時期的にまたがるとと思われるものや、過渡期的な様相をもつものである。第Ⅱ群土器は、1ブロックに分布が認められ、点数は16点である。1ブロックでは、I—43・44・45、J—44・45・47、K—45・47・48に分布が認められる。第Ⅲ群土器は、1ブロックのI—43・44・45、J—44・45、K—43・47・49に分布する。分布は、第Ⅱ群土器の分布域の中に納まる。

第Ⅳ群土器の分布は、第13図右に示した。1ブロックから2点のみ出土している。J—46出土である。

分布傾向の時期的推移であるが、第Ⅰ～Ⅲ群ともに、1ブロックからの出土が認められる。2ブロックは、第Ⅰ・Ⅱ群土器の出土は見られず、Ⅲ～Ⅴ群土器が1個体出土するのみであるが、総出土の個体数が少ないため、このブロックに第Ⅲ群土器の段階から廃棄が無いとは断定はできない。

1・2ブロック共に、第Ⅲ群土器の段階で、最も分布範囲と個体数が多くなり、第Ⅰ～Ⅲ群、第Ⅲ群土器の段階には、廃棄場所の変化は無いが、分布域の縮小と個体数の減少が認められる。第Ⅲ群は消滅に向かい、僅かに1ブロックの1グリットに分布する。

5 まとめ

結果をふまえて、若干の補足と所見を述べてまとめたい。

小田島城跡出土の弥生土器は、北二の丸地区Ⅰ層の出土状況において、大きく1ブロック、2ブロックの廃棄

単位があり、それぞれのブロックは、第Ⅰ群土器から第Ⅲ群土器の段階まで継続的に廃棄がなされていることが想定された。遺物の廃棄が最も多くなるのは、第Ⅲ群土器の段階である。しかしながら、それぞれのブロック内では、出土土器の群の違いは、出土地点の標高差や、ブロック内の地点の差としては捉えることはできなかった。

遺跡内の位置づけとして、第Ⅲ群土器を中心とした遺物包含層は、調査区東側へ広がることが想定され、地形的に東側に向かって標高が高くなることより、調査区の東側に、居住域が広がっている可能性がある。

この報告を作成するにあたり、高桑登氏からは、遺構平面図や調査状況の情報の提供をいただいた。小林圭一氏からは、関連文献のご教示をいただいた。須藤隆氏からは、報告書作成時に弥生土器についてのご教示をいただいた。ここに記して感謝申し上げる。

註

- 1・2) 高桑登他2004『小田島城跡発掘調査報告書』『山形県埋蔵文化財センター調査報告書』第131集
- 3) 蟹沢遺跡出土の弥生土器は、『山形考古』で報告されている弥生土器集成によると(加藤・佐藤・二瓶1986、1988)、弥生前期に相当する資料が主体であるが、少量ながらも、小田島城跡第Ⅰ・Ⅱ群土器に併行する土器の出土も認められ、弥生中期も存続していたことが伺われる。
- 4) 小林圭一氏は、北柳遺跡の報告において、須藤隆氏による山王囲遺跡の層位区分に基づく宮城北部の型式区分との対比させる形で、「縄文時代晩期末葉～弥生時代中期編年試案」を提示した。小田島城跡出土の弥生土器は、この小林氏の編年に対応させて、青木畑式段階—蟹沢・漆山に対応すると考えられる土器を第Ⅲ群土器、山王Ⅰ層式段階—蟹沢・地藏池に対応する土器を第Ⅳ群土器、鱸沼式段階—松留・地藏池・稲下に対応する土器を第Ⅴ群土器、杵形囲式段階—漆山に対応

- する土器を第Ⅵ群土器とし、「杵形囲式段階」以降と推定される土器については、第Ⅵ群土器に分類した。
- 5) 小田島城跡第Ⅲ群弥生土器に併行する土器として、生石2遺跡B区出土土器があげられる(安部実・阿部明彦1985)。この土器群には、変形工字文C-1・2型に類似する文様が認められる。また小田島城跡の鉢・浅鉢B類に相当する文様も認められ、工字文の折り返し部分の間に、上下2カ所の短沈線を入れる個体も見受けられ。
- 6) 須藤隆氏の分類(須藤1983)による。
- 7) 調査を担当した高桑登氏によれば、遺物包含層Ⅰ層については、層厚約20cmの黒色土層で、分層は不可能であったという。包含層は、特に炭化物や焼土のブロックなどは含まれておらず、この包含層を掘り込んでいる弥生時代の遺構や、包含層下面での弥生時代の遺構は検出されていない。

引用文献

- 安部 実・阿部明彦 1985『生石2遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書 第89集
- 加藤稔・佐藤嘉弘・二瓶由佳 1986「最上川流域の弥生土器集成・資料篇—()村山編—」『山形考古』第4巻第1号 pp.1～53
- 加藤稔・佐藤嘉弘・二瓶由佳 1988「最上川流域の弥生土器集成・資料篇—()村山編・遺物解説—」『山形考古』第4巻第2号 pp.32～50
- 志間泰治 1971『鱸沼遺跡』
- 須藤 隆 1983「東北地方の初期弥生土器—山王Ⅰ層式—」『考古学雑誌』68—3 pp.1～53
- 須藤 隆 1998『東北日本先史時代文化変化・社会変動の研究』纂修堂
- 小林圭一他 1997『北柳1・2遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書 第48集
- 高桑登 他 2004『小田島城跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書 第131集

